

朗読 CD 「夏の夜の庭で」 (In the room・イン・ザ・ルーム分岐1エンドアフターストーリー)

//BGM→FI

タイトルコール「インザルーム。夏の夜の庭で」

//BGM→FO

■場面1・リビング(夜)

ヒロイン『そろ。まるい。まる』

……そうきみがつぶやいた。

窓ガラスに顔を押し付けようにして、外を見ているきみ。
白い膝丈のネグリジエを着たきみが、
そんな仕草をしていると童女のように可愛らしい。

誠二「何が見えたの？」

きみが無言で指をさす先には、赤みをおびた丸い月があった。

きみは言葉をほとんど話さなくなった。
物とその名前を結びつけることがほぼ出来なくなったからだ。
その代わり、表情は驚くほどに豊かになった。
今も瞳を輝かせながら、そばに来るように僕の手を引っ張る。

//SEふたり、数歩歩く

僕にはわかる。

ヒロイン『誠二さん、お月さまが綺麗よ』

……きみはそう言いたいのだ。

誠二「本当だ。すごい満月だね……庭が明るい……」

月明かりに照らされた庭はやけに神秘的に見える。
伸び放題に生い茂る草花や灌木のせいだ、
ふだんは近所の子どもたちにお化け屋敷扱いされているのに。
イギリスの民話あたりに出てきそうな風情だ。
僕はきみを夜の散策に誘うことにした。

誠二「庭に出てみようか？」

誠二「うん。に、わ。庭で遊ぼう」

■場面2・玄関く庭(夜)

誠二「さ、靴を履こうね」

外出をしないのですっかり柔らかくなかった足に久しぶりに靴を履かせた。すると、とたんに渋い顔になる。

誠二「ん？ いやなの？ 靴を履きたくないのかな？……あっ」

履かせた靴を、ぶらぶらさせて脱いでしまう。
まあいいか。怪我をするような危ないものは落ちていないだろう。
僕は靴を履かせることを諦める。
きみが気持ちよく過ごせることが一番だから。

//SE 玄関ドア、開ける

ドアを開けると満月はいつそう大きく見えた。
童話に出てくるお月さまのようだ。
『やおおふたりさん、こんばんは』と話しかけてくる。

//SE ヒロイン、駆ける

誠二「あ、いきなり走っちゃ危ないよ」

土の上に素足をおろしたきみは『ひゃ』と声をあげた。

誠二「あはは、土の感触が変だったのかな」

満面の笑みだ。

ヒロイン『裸足、気持ちいいよ。誠二さんもやってみて』

……その顔はそう言っている。

誠二「ふむ？ なるほど。そういうお誘いには乗らなきゃだね(笑)」

僕は笑いながら靴と靴下を脱いで、きみの後に続いた。

■場面3・庭(夜)

//SE 虫の鳴き声・ふたりのかるやかに歩く音

昼間はむっとするような草いきれも少し和らいで感じる。
僕は初めて知った。
直接、素足で触れる雑草が生々しい生き物の気を発していることを。

誠二「ああ……なんだかわくわくするな。子どもの頃の夏を思い出すよ」

//SE 虫の鳴き声が、急に止まる

誠二「虫の鳴き声が……あれ。……止まったね」

虫たちはとても慎重で臆病なのだ。
僕たちが近づいたので警戒して歌うのをやめてしまった。

誠二「シー、だよ。虫の唄を聞かせてもらおうね」

僕は人差し指を口に当ててそっときみに合図する。

//SE 虫の鳴き声 (シーン終わりまで断続的に)

やや遠い一角で再開された合唱に、しばらくの間僕らは聞き惚れた。

豊かな、贅沢な時間だ。

この生活を始めてから幾度となく思うことだ。

こんな未来があると知っていたれば僕は……。

あんなに苦しい時間を過ごさずに済んだのだろうか。

//SE 虫の鳴き声 (シーン終わりまで断続的に)

誠二「何を見ているの?……ああ、それは宵待草だよ……夜に咲く花だ」

この生活を始めて一つの奇跡が起きた。

きみが僕を認知するようになったのだ。

と、言っても僕を『夫・島崎誠二』だと理解したわけではない。
その認知の源は僕の匂い……嗅覚によるものだった。

嗅覚を感じる器官は脳の中の大脳辺縁系という原始的な部位にある。

実に動物的な判別方法だが、ともかく僕は『安全な人間』として認知された。

記憶の無い当時でも『懐かしい匂い』とたびたび言っていたように、

僕の匂いはきみにとってホッとできる安心するものだったのだ。

それがわかった時の僕の喜びはとも言い表すことはできない。
神様はいると思った。

きみは、ふいにしゃがみこんだ。

ひざを抱えて木の小枝をじっと見つめている。

誠二「何か見つけたの?……んっ (かがむ息)」

ほくも同じように小枝を見た。

すると、とても奇妙な生き物が枝の先端でもぞもぞと動いていた。

誠二「……セミの幼虫だ」

きみは、せみ、せみ、と口の中で繰り返す。

誠二「今から面白いことが始まるよ。見ていよう」

動きを止めた幼虫からパリ、と乾いた音がした。
脊中に亀裂が入ったのだ。

亀裂の中から白い水気を含んだ身体が出てきて、それが次第に反り返る。そのあと、セミはまた身体を丸めて元の殻をつかみお尻を抜き出した。

誠二「ああ、やっと全身が出たぞ」

セミはまた長い時間をかけてすっかりと身体を伸ばした。きみは嬉しそうに僕を見る。

誠二「ふふ。……セミさん、お疲れ様でした」

くしゃくしゃだったセミの羽が乾いてすっきりと三角形に広がった時、月は天の真上にあつた。

//SE フクロウの声（シーン終わりまで断続的に）

時間の概念がないきみは飽きるということがない。記憶する力がないことも関係しているのだろう。その時に見るものだけがきみの興味を引き、それに伴う行動はいきあたりばったりだ。その、常にありのままの姿には何か人間離れたものすら感じる。今きみは、ミモザの枝をゆらして、黄色い花びらを散らすことを純粋に楽しんでいる。妖精とはこういう生き物を用いるのではないだろうか。

誠二「きみは……美しいね……」

姿形の美醜などではなく、この心の清らかさ、生き様を美しいと思う。この美しい生き物が自分だけのものであるという事実には、僕は仄暗い歓びを覚える。

誠二「あはは、そんなに揺らしたら花びらが全部散ってしまうよ」

誠二「そうか。……妖精さんはミモザの花びらで髪の毛を飾るんだね」

僕は花びらまみれのきみに近づき、そっと抱きしめる。

誠二「んっ（抱きしめる息）愛してるよ」

誠二「うん。愛してる……きみも言っで」らん」

いつものようにきみにオウム返しをさせる僕。

誠二「は(笑)……ありがとう。嬉しい」

きみのその言葉は僕をいつも有頂天にさせる。

誠二「キスちよっと長め」

あごを持ち上げてキスを落とすと、じわりと腕の中の体温が上がった。きみからのサインだ。

誠二「しようか」

そう囁いて、ネグリジエのすそに手をいれ、薄い下着をおろして片足から外した。舌を絡めるキスを施しながら、下生えを指で漉く。

誠二「(絡むキス音長め) 〓前のナレにかぶせる」

中指で蕾を探り当てると、きみが甘い吐息を僕の唇にこぼし始めた。

誠二「二二、気持ちいい？ 気持ちいいって言って」

喘ぐのに忙しくてオウム返しができないきみ。

誠二「たくさん濡れてきたよ……気持ちいいんだね」

もっと指を受け入れやすいよう、片足を折り曲げ僕の腕で固定する。だんだんひざが震えだして可哀想になったので、脊中をアカシアの木の幹にもたれさせてやった。

誠二「この方が楽だね」

赤い半開きの唇が誘うようにわななく。たまらなくなつて、ネグリジエの布の上から乳首の場所の見当をつけて吸いついた。

誠二「リップ音〓胸をしゃぶる感じのもの〓後ろのナレにかぶせる」

広がる唾液のしみ越しに、淡くピンクの影が浮かび上がり、その卑猥な様子に僕は見とれた。乳首を交互に吸いながら指を激しく出し入れするうちに、ひときわ可愛い喘ぎをあげてきみは達した。

身体を返し木の幹を抱えさせ、ネグリジエを脊中までまくり上げた。僕は土の上に跪き、きみの陰部に口をつけ、蕾をついばむ。きみの様子を見ながら会陰の方まで舌で舐め上げた。

誠二「(クンニのリップ音長め) 〓後ろのナレにかぶせる」

繰り返すと大きく腰がゆらめき始めた。まるで風に揺れて受粉を待つ花のようだ。花は、とても甘い蜜があるよ、と虫達を誘惑する。蜜を求めてさまざま哀れな一匹の虫が僕だ。

誠二「はあ……もう欲しいよ……んっ」

僕は辛抱できなくなった。

//SEジッパ―下ろす音

誠二「挿れさせてね」

誠二「そう。挿れる。木に捕まっついてね」

右手で猛るものを取り出し、左手できみの腰をつかむ。
ふと、月の光が作る自分の影がきみの脊中に落ちていることに気づいた。

誠二「あ。……ねえ。お月様に見られてるよ」

誠二「うん。お月様に見せてあげよう……んっ……ん、ん、（息遣いやや長めに）」

僕たちが立てる隠微な水音は、しばらくの間、辺り一帯に響き渡った。

//SE 虫の鳴き声

//SE ふくろうの鳴き声

誠二「んんっ……（射精）」

僕の放埒を受け止めた瞬間、きみは膝から崩れ落ちた。

強い絶頂を極めて失神してしまったのだ。

体力が落ちているのに、長い間外に出ているのが堪えたのだろうか。

誠二「!?!?……ごめん！ 部屋に戻ろう！ んん（抱え上げる）」

//SE 駆ける音

//SE 玄関ドア開く音

//SE 虫の鳴き声→FO

■場面4・寝室（夜）

僕はあわててきみを家に連れ戻りベッドに寝かせた。

誠二「んしょっと（ベッドに下ろす）……は——……足を拭かないと……」

誠二「んっ、んっ（ヒロインの身体を拭く作業の息）||後ろのモノローグにかぶる」

M（裸足で外で愛し合うなんて（笑）……まるで古代の恋人同士みたいだ）

//BGM

天空を照らす満月。

生い茂る草木や虫たちの音色。

きっと大昔の恋人たちもさきほどの僕たちと同じように、

そんな自然物に見守られながら愛し合ったのだろう。

動物のように求め合うことが純粹な愛情表現だった時代。

M（今の僕たちはきっとそんな人間なんだろうね）

それはとても幸せなことだと僕は思うのだ。

//BGM→次第にFO